

MANTIE DIAOCHA BAOGAO

遼寧省檔案館 編

滿鐵調查報告

第四輯

15

SHANGHAI NORMAL UNIVERSITY PRESS
上海師範大學出版社



滿鐵調查報告

MANTIE DIAOCHA BAOGAO

第四輯

15

遼寧省檔案館 編

GUANGXI NORMAL UNIVERSITY PRESS
廣西師範大學出版社

· 桂林 ·



調查報告書第二十卷 本溪湖、城廠間鐵道調查報告書

滿鐵庶務部調査課 一九二八年五月及九月 ……………

1

資料第七編 敦化、哈爾濱間鐵道預定綫勘査報告

滿鐵臨時經濟調査委員會 一九二九年七月 ……………

323

在滿中國諸鐵道從業人員工資待遇研究

滿鐵總務部勞務課 一九三〇年八月 ……………

451



調查報告書第三十卷

本溪湖、城廠間鐵道調查報告書

調査報告書第三十卷

本溪湖
城間鐵道調查報告書

第一編
本溪湖
城間線路調查報告書

附錄 比較線に就て

庶務部調査課

凡 例

一、本調査の主要なる目的は田師伏炭礦その埋藏量二千萬噸と稱せらるゝの石炭を搬出すると共に地方開發に貢獻する爲最も經濟的なる線路を撰定するに在り。

一、本調査に際し本溪湖煤鐵公司溪城輕便鐵路公司及び本溪湖の市民諸氏が多大の便宜と貴重なる資料を寄せられたる事を深謝する處である。

一、書中意見に渉るものは筆者の私見であつて調査課の意見ではない。

一、本調査は昭和二年十二月に遂行したもので報告書は課員鈴木清の記述にかゝり挿入の圖面は同越山宣勝の作成によるものである。

昭和三年三月

庶務部調査課

第一編

本溪湖 城廠間線路調査報告書

目次

第一章 緒言	一
第二章 線路	二
第一節 地勢	二
第二節 沿道概要	三
第三節 線路の撰定	八
豫定本線と比較線の優劣	
第四節 豫定線路の説明	一一
第五節 設計及工事概要	一四
第六節 建設費	一六
第一項 王坎—牛心臺間廣軌改築費	一七
第二項 牛心臺—城廠間線路建設費	二二
第三項 田師伏溝口—大堡間線路建設費	三〇
第三章 輸送貨客の想定	三二

第一節 農産過剩額の想定.....三二

第二節 木材及薪炭.....三三

第三節 石炭.....三四

第四節 雜貨.....三五

第五節 旅客.....三五

第四章 收支採算.....三五

第一節 建設費.....三五

第二節 貨物收入.....三六

第三節 旅客收入.....三七

第四節 營業費.....三七

第五節 收支採算.....四六

第五章 結論.....四七

附 錄 比 較 線 に 就 て

第一章 本溪湖、城廠間比較線の建設費.....五三

第一節 太子河沿岸線.....五三

第二節 山手線.....五八

第二章 草河口、城廠間比較線の建設費……………六三

第一節 緒言……………六三

第二節 線路……………六四

第一項 地勢及沿道概要……………六四

第二項 線路の説明……………六五

第三項 建設費……………六七

第三節 結論……………七一

第一編

本溪湖 城廠間線路調査報告書

第一章 緒言

今度の溪城鐵道延長線の調査は昭和二年三月二十二日奉天鐵道事務所長佐藤俊久氏の發案にかゝるものであつて當時同氏は溪城輕便鐵路公司の理事として同鐵道が漸く營業收支相償ふのみで其運搬貨物は只單に牛心臺炭に限られて居る關係上同炭礦の盛衰は直ちに同鐵道に影響し頗る不安定である。之が轉開策として同鐵道の牛心臺炭礦の兼營か或は同鐵道の權利線たる牛心臺城廠間の延長線の開設かを考慮された。然るに大正十四年に於ける地質調査所の調査に據れば田師伏炭礦は頗る有望で其埋藏量も二千萬噸を下らないと謂ふ事であるから、同輕鐵の延長に對しては研究の價值あるものである。同延長線に就ては大正三年谷直諒氏の踏査及大正八年板倉銳丸氏の調査報告がある。然し今日に於ては奥地通化、興京地方の土人農作は勿論同地方に於ける朝鮮人經營の水田等著しく發達し之等の產額も相當數量に登つて居る。然るに一方奉海鐵道は昭和二年七月海龍城迄開通後は營盤より興京支線を布設する計劃であると云ふから此支線にして實現せば通化、興京方面の貨物は悉く奉海線に流れ我が輕鐵延長の機を失ふに至るやも計り難い。斯くては同輕鐵をして愈々維持困難に陥らしむるものと考へられる。仍て此の際多少の犠牲を拂つても輕鐵延長をした方が得策とする次第であつて再調査を要すると云ふ意見書に對し藤根理事が賛成せられ溪城延長線に對して再調査する事となつたのである。

然るに佐藤氏の案に依れば北方大車路と稱する道路に沿ふ線路が太子河沿岸線並山手線に比し隧道橋梁が少なく且水害の憂なしと認められ、この線路を主として調査してほしいとの希望であつた。然るに北方大車路線は小市及

二
び山城溝の石炭を失ふもので假令建設費が低廉であつても輸送貨物が少なくては營業收支上いづれが有利であるか比較研究の必要がある。仍て此際仔細に各線路に就て調査する事は却つて正鵠なる判斷を下す上に役立つものであるから太子河沿岸線、山手線並草河口線も併せて踏査する計劃を立てた。

調査班員は一行四名、鐵道線路の調査、調査課鈴木清、一般經濟の調査、調査課上之園權太郎、農業及林業の調査、農務課藤田廣、地質及礦產の調査、地質調査所赤瀬川安彦は昭和二年十一月十五日大連を出發し本溪湖に至り溪城輕便鐵路公司より大釜七藏氏道案内として同行する事となり此處に旅裝を整へ十一月十九日本溪湖を出發し牛心臺に到り牛心臺炭礦を調査し翌二十日より大車路に沿ひて陸續と高力營子より雙嶺を経て清河城に出で馬家城子に到る、ときに二十二日である。馬家城子より太子河を下り小市に出で瀋陽時に達した、更に小市より八盤嶺の天嶺を横り大堡に到る、大堡は田師伏炭礦の中心地であつて富華公司が大堡炭礦を經營し年額約五千噸主として地方の需要に應じて居るが太子河の水運によつて奉天營口方面に出廻るもの約六百噸である。

十一月廿九日大堡を出發し田師伏溝口にいたり翌三十日城廠に到着した。城廠の經濟狀況視察の爲一日滞在翌十二月二日草河口に向つて出發賽馬集草河城を経て草河口に到る、時に十二月六日である。之より本溪湖奉天を経て大連に歸着したのは十二月九日であつた。

本旅行日程二十五日、途中八盤嶺の嶺を越える時は馬車通ぜず止むなく驢馬に據つたが其他大なる支障なく一致協力調査の使命を完了し得た事は欣幸とする所である。

第二章 線 路

第一節 地 勢

太子河はその源を興京縣平頂山に發し西流して分水嶺より發する支流を併せ本溪縣の中央より、稍々北部を東よ

り西に横斷して遼陽縣に到るものであつて本溪縣の平地は主として太子河の河谷と云ふも過言でない。然るに太子河はその流域摩天嶺に近かく高峯群立して河岸に迫り平地幅員四五軒に潤けたるものあれども多くは三四百米の河谷で到る處河川の氾濫舊跡たる砂層がある。本溪湖城廠間は約二十五邦里その間太子河の河谷の稍々潤けて盆地をなすものに牛心臺、小市、馬家城子、田師伏溝口、城廠の平野があるが其他は河谷狹小兩岸斷崖絶壁をなし河川屈曲轉流する處が多く其最なるものは温泉寺前後約四邦里、水洞前後約三邦里である。殊に兩岸の山岳急峻であつて樹木に乏しく出水早く最大洪水位は平水面上十米に及ぶと云ふ仍て河床は大洪水毎に變化し河谷の大半は砂礫を以て蓋はれ急坂を耕作するの止むなき状態である。上流平頂山分水嶺附近も鬱蒼たる森林なく纔に杭木、薪炭等に利用せらるゝ潤葉樹の疎林に過ぎない。而して興京老城方面の交通は平頂山に據つて遮られ桓仁縣方面の交通は摩天嶺の高峯によつて中斷せられ太子河流域の物資が本溪湖驛に出廻るにすぎない現状である。

第二節 沿道概要

本溪湖城廠間の大車路とは本溪湖より牛心臺、高力營子、雙嶺を経て清河城に出で水洞より馬家城子を過ぎ田師伏溝口經由城廠に至るものでその行程約二十五邦里である。次に太子河沿岸をすぐるものは本溪湖より牛心臺に出で更に東進して山道温泉寺に到り小市を経て水洞に出で馬家城子より城廠に至るものでその行程約二十四邦里である。最後に山手をすぐるものに本溪湖より小市に出で山城溝を経て八盤嶺を越え大堡を過ぎ城廠に達するもの約二十五邦里で大車路と殆ど同一里程であるが途中八盤嶺の天嶮は道路急峻にして馬車を通ぜざるの缺點がある。今次に上記三道に就て大體の沿道事情を述べん。

(一)大車路(清河城經由)

本溪湖より直ちに太子河を渡りて現在の溪城輕鐵の太子河連絡所に出で太子河の左岸輕鐵線路に沿ふて大峪堡

に出で崔家より東進一嶺をすぎて臥龍に出で臥龍川を渡りて牛心臺にいたるものでその行程約四邦里である。

牛心臺は牛心臺炭礦を以つて知られたるもので溪城輕鐵は同炭礦の運炭鐵道にして太子河連絡所、牛心臺間九哩三鎖十四軒六分があり炭礦支線として紅臉溝、王官溝、大南溝、小南溝の四線がありその總延長五哩七分九軒三分であつて現在日支合辦にて經營の牛心臺炭礦は紅臉溝、王官溝の二箇所を採掘し大南溝、小南溝の二箇所は廢坑となつて居る。同炭礦の出産量は年に據り多少の異動があるが牛心臺驛で取扱ひをなしたる數量を計上すれば次の如くである。

牛心臺驛發送石炭數量

年	度	數	量	年	度	數	量
大正	五	年	四九、三七〇	大正	十	年	四九、一〇六
同	六	年	七〇、二一二	同	十	年	五三、六七五
同	七	年	四三、三一〇	同	十	年	七三、三六五
同	八	年	七七、八五九	同	十	年	八七、九一四
同	九	年	三四、九八二	昭和	元	年	七四、〇〇五
同	十	年	四四、六五三	平	均	約	六〇、〇〇〇

則ち一箇年平均六萬噸の出炭がある、而してその販賣先は主として奉天であつて家庭用炭及び練炭として用ひられて居る。牛心臺より北東進して太子河を渡り偏嶺堡子に出づ、同地は戸數五十、人口五百と稱せられ附近に耕地が少なく百天地と云へ大豆を輸出し高粱、粟等に移入して生計して居ると云ふ、東々北偏嶺をすぎて高麗營子に達す偏嶺は道路頂上標高二百七十一米河床を抜く事約百米兩側急峻であつて最急八分の一位であり道幅三米乃至六米であるから馬車の交通に支障はない。

高力營子は西麻戸河の右岸山麓にあり平地廣くその幅員約一杆豐饒なる農耕地を控へ戸數四十、人口三百と稱し本溪湖を去る九邦里小學校、本溪湖警察第四區、保甲團等あり主要なる驛站である。

道路は東進して頭道河子に出で左折して西麻戸河を右に渡り左に越え狹長なる河谷を縫ふて進む、道は幅員四米乃至六米である。本溪湖より十三里半にして雙嶺に達す、海拔三百五十二米、全山雜木を以て蓋はれ、いづれも五年乃至十年生の灌木で利用材としての價值あるものがない。雙嶺前後の道幅二米乃至三米であつて、纔に車馬の通行を許す程度である。その兩側勾配は七分の一、路傍には片麻岩の露出を見る。

雙嶺を東に下れば頗る緩慢なる勾配で清河の平野は西より東南に開け、望城崗子地方最も廣く幅員二杆に及び下れば清河城にて五百米となり、その東方二杆附近にて三百米の咽喉部がある。

清河城は本溪湖を去る十五邦里、城廠に十邦里、周圍約一杆六百米の城壁あり、高さ三米乃至四米のもの、南側及び東側に殘留し高麗の築城せるものと稱せらるゝ、戸數六十五、人口七百人と云ひ町形をなし、東西一條の大道あり、その長さ四百米、小學校、郵便代辦所、雜貨舖、馬車店あり、本溪湖城廠間の唯一の小市街である。

清河城より東北進して小甸子に出づれば三家子の平野、南北に連なり更に三家子より東方に幅員一杆の平野五、六杆の間に跨る。之より富家樓子を経て趙家甸子に出づる間、幅員二杆の平野、清河の兩側にあつて地味肥沃、高粱、大豆、粟が主要農産物である。趙家甸子より太子河を二回渡河すれば水洞に出で、左折右轉更に三回太子河を渡れば馬家城子に達す、途中の道路は幅員六米乃至四米平坦なる大道であるが太子河の渡河數回を要し、その水深六十纏乃至七十纏に及ぶ箇所があり、車行稍々困難である。附近石灰岩多く處々に鍾乳洞を見る、河谷狹ましく低濕、兩側絶壁をなし夏季の交通は困難である。

馬家城子は周圍約一杆の城壁あり、壁の高さ二米、高麗の遺跡らしく平頂山より發したる太子河本流と分水嶺より發したる太子河支流とが玆處に合して西流するのであつて、馬家城子は兩河に據つて圍まれたる長方形の中央に位

し兩河の咽喉部にあたる重要な位置にある戸數二十、人口二百本溪湖を去る二十邦里、城廠に五邦里である。

道路は幅員四米乃至六米馬家城子より直ちに太子河を渡り北甸子、南臺、田師佚溝口を経て城廠に達す、太子河を渡河する事四回附近平地は太子河の亂流のため大半は不毛の地で農民は山の急坂を耕作し殆ど可能未耕地を見ない、城廠は戸數六百六十二、人口四千九百八十六と稱し市街は東西南北の大街あり、東西九百米南北五百米であつて太子河の右岸にあり、平水面より高さ約四米である、本溪湖第四區の警察署、税捐局、商務會、小學校、保甲團等あり、油房、糧棧、雜貨、舖馬車店等百戸を數ふ城廠に於ける取引は主として本溪湖で二割は草河口である。

(二)太子河沿岸沿道

本溪湖より牛心臺までは同一道路であつて牛心臺より太子河沿岸を放れ直路溫泉寺に到る道路は山道で比較的良好であると云ふも今國の調査に通過せないからその状態は不明である。

溫泉寺は本溪湖を去る九邦里半太子河の左岸高臺にあり西は高峯によつて遮られ東は太子河を距て、青石嶺の峻峯を望見し太子河河谷は南より北に延び溫泉寺の東方太子河を畔まで約四百米間緩漫なる斜面を残すのみで兩岸斷崖絶壁をなし河水清潭風光明眉である、寺院は河岸より約四十五米の高さにあり、奉天韓王時代の建立にかゝり其後數回の修築を経て今日に到る、韓王當地に遊獵せられたるときその狗毛脱病にかゝり草間の湯にて全治せるにより初めて溫泉の湧出を發見し其後寺を建て溫泉を修築して世に紹介したるに始まると云ふ、仍てその溫泉の名を狗兒湯と云ひ、最近本溪湖附近の浴客のため浴室、湯槽等を改築し寺院には浴客を收容する設備あり、浴客一箇年數百人内日本人百餘人である、最近本溪湖溫泉寺間に自動車道路を築造し又は牛心臺輕鐵を延長して溫泉寺に達せしむる計劃ありたるもいづれも資金難のために中止するに至つた。

道路は太子河より青石嶺を経て小市にいたる、小市は湯河の左岸にあり觀音閣の炭礦を控へ小市平野の中央にあり戸數百、人口八百南北に市街形をなす、小市より太子河の左岸高臺を過ぎて太子河を左に渡り右に越え水洞にいた



城廠の市街



城廠

城廠の遠望